

国際学術講演会実施報告書

「共振する東アジア3 サブカルチャーからみる日本と台湾の戦後」

許 時 嘉

(人間文化学科)

- 日 時：2014年2月23日 13:00~17:00
- 場 所：山形大学基盤教育1号館112教室
- 発表者：陳培豊（中央研究院台湾史研究所研究員）、李衣雲（政治大学大学院台湾史研究所副教授）、三澤真美恵（日本大学教授）
- コメンテーター：森岡卓司（山形大学人文学部准教授）、中村唯史（山形大学人文学部教授、現・京都大学教授）、大久保清朗（山形大学人文学部准教授）、許時嘉（山形大学人文学部准教授）
- 総合司会：中澤信幸（山形大学人文学部准教授）

2014年2月23日（日）に人文学部国際学術講演会「共振する東アジア3 サブカルチャーからみる日本と台湾の戦後」を開催した。これは、演歌の変遷、漫画の流通、映画表象をテーマに、日本と台湾に共通する歴史記憶、及び台湾における日本のサブカルチャーの変容を考えることを目的に、開催されたものである。本講演会では、日本国内及び台湾から三人の講師を招いた。それぞれの講演概要は次のとおりである。

陳培豊は、「台湾で流された股旅演歌——1960年代台湾における出稼ぎ現象」と題して発表した。股旅演歌は日本独特の歌のジャンルである。映画、演劇、小説と全く無関係に単なる歌の雰囲気や特徴に基づいて作られた股旅風のものも、全くないわけではない。しかし、いわゆる股旅演歌とは、多くは日本の伝統文化に立脚した、虚像の歴史と言われる時代物の主題歌を指している。

1960年代、高度経済成長に伴って、日本では農村から人口が流出し大規模な人口移動が起こる。高度経済成長の下、その社会変容に応じて、歌謡

曲は故郷を離れて都会で働く日本人の「郷愁」を歌っている。台湾に目を転じると、ほぼ同じ時期に、高度経済成長による農村人口の流出、つまり出稼ぎで大規模な人口移動が起こる。50、60年代に起こった類似の社会変容の経験、及び台日歌謡曲文化の類似性に基づいて、台湾人はこの叙事的、写實的「都会民謡演歌」の日本語原詞の意味を借用した。そして大量に台湾版「都会民謡演歌」を作り、台湾社会に流行させたのである。この「都会民謡演歌」が内包するルサンチマン（resentment）、悲しみ、苦難は、台湾人の自画像となっただけではない。抑圧的な政治体制や言語的な隔たりのために、本省人にとって、これらの歌謡曲は音声テキストとして重要な文芸経験となった。台湾版「都会民謡演歌」の存在は、政治上、文化上、また歴史上において重要な意義を持っている。

同じ時期、同じ高度経済成長によって、台湾と日本では、共に農村の出稼ぎ現象、大規模な人口移動が起こっている。但しこの類似する社会変容が起こった50、60年代の、両者の政治的背景及びもたらされた社会的意味は、必ずしも一致するわけではない。総じていえば、非生産的、任侠博徒、喧嘩の部分さえ修正し書き直せば、日本の股旅物の精神、真髓、時代背景は、60年代の台湾社会の状況とある程度合致する。股旅歌謡曲という、かつての植民地支配者の「伝統」歌謡の趣意、内容は、日本にとっては「過去」であろうが、本省人にしてみれば馴染みのある、かつ借用しやすい、現在進行形の自分の境遇を描くための格好のテキストである。

李衣雲は、「戦後台湾における漫画検閲制度と日本漫画のアンダーグラウンド的展開」と題して

発表した。戦後、連合軍の指令により台湾を接収した国民党政府は、1946年より日本語の使用や日本文化を禁止した。このような「脱日本化」政策により、台湾市場から日本の書籍が消え、日本統治時代に台湾で流通していた漫画関連出版物も、次第に姿を消して行った。1949年、蔣介石政府が台湾に移転し、自分自身が唯一の中国代表であるという正当性を強固にする為、台湾での中国化政策を一層積極的に推し進める事となり、国民党の主張する中国の歴史と異なる歴史的事実は全面的に排除された。当然、日本統治時代の歴史も抹殺される事となり、日本関連の事物はすべて表面上からは姿を消す事となった。日本漫画も、日本を連想させる「手掛かり」を取り除いた上で、アンダーグラウンドの形で流通するようになった。しかし、この様な状態に置かれながらも、日本漫画は台湾において強大な経済力を生み出し、漫画の文化的位置さえ構築した。

三澤真美恵は、「台湾映画『セデック・バレ』にみる再現の不可能性と可能性」と題して発表した。そして『セデック・バレ』(2011)の日本語字幕翻訳を監修した経験談から、映像を再現することの限界を示した。『セデック・バレ』は日本植民地統治時代に起こった、台湾原住民族による抗日武装蜂起「霧社事件」を描いて、社会現象ともいべき大反響を起した。だが、かつて『悲情城市』が歴史的事実関係を圧縮して描いたことが、国民党政権に対する妥協として批判されたように、『セデック・バレ』もまた歴史的事実関係との矛盾を指摘され、原住民族理解の点から批判を受けた。二作とも劇映画であることに鑑みれば、叙述に事実関係と異なる部分があることがこれほどまでに問題とされるのは、不合理ともいえる。つまり、そうした不合理な批判を引き起こすのは、これらの映画が情動に働きかけるリアリティをもっているがゆえの事象ともいえる。そして、そのリアリティの一端を担うのは、これらの二作がいずれも、音声の面において先駆的な試みを行っていることと無関係ではないだろう。すなわち『セ

デック・バレ』では、現在ではほとんど失われてしまったセデック語が再現されているのである。いずれも脚本は標準中国語で書かれているにも関わらず、である。つまり、劇中で再現される言語は、必ずしも監督自身が聞き話す言語とは限らない。

そして、日本での公開時には、それらをあらためて日本語字幕に翻訳することになる。台湾の劇場では、観客は標準中国語で書かれた台詞が、調査採集によって再現されたセデック語で話されるのを耳で聞きつつ、目で標準中国語字幕を追って、その内容を理解する。これに対して日本の観客は、同じく耳でセデック語を聞きつつ、標準中国語脚本の台詞とその英語訳をもとに、厳しい字数制限のもとで作成された日本語字幕を目で追って、その内容を理解することになる。『セデック・バレ』の字幕翻訳を監修するにあたって痛感したのは、そうして繰り返される再現の隙間に、消えたり生まれたりする意味の不可思議であった。訳すべき中国語脚本にも英語訳にもない「ガヤ」(セデック族にとっての憲法のようなものとも言われる重要な概念)という音が、画面の台詞からはっきりと聞こえた時、字幕の「掟」の文字に「ガヤ」というルビをふらずにはいられなかった。歴史を映画として再現すること、消えた言語を再現すること、言語を音声として再現すること、それをふたたび別の言語で字幕として再現することなど、本報告では『セデック・バレ』字幕翻訳監修という報告者の体験を通じて、映画における再現の不可能性と可能性の問題を提起した。

最後のラウンドテーブルでは、「哈日」(日本大好き)のグローバル化をテーマにして、台湾における日本表象と文化受容の過去、現在、そして未来を考えてみた。日本のサブカルチャーが世界に無差別に広がる時代となった中、過去の植民地時代とその残影を現代台湾社会でどのように捉えるべきなのか、三人の講演者と本学教員で意見交換をした。会場では講師やコメンテーター、フロアの聴衆の間で活発な議論が交わされ、戦後日本と

台湾の文化的な受容関係, 及び大衆文化研究の方法論を批判的に再考することができた。本講演会は山形大学人文学部国際学術講演会助成金を得て実施した。